

入水の譜

—鎮魂と転生の潮路—

青木敦

はじめに

其れより入り幸でまして、走水の海を渡りたまひし時、其の渡の神浪を興して、船を廻らして得進み渡りたまはざりき。爾に其の後、名は弟橘比売命白したまひしく、「妾、御子に易りて海の中に入らむ。

御子は遣はさえし政を遂げて覆奏したまふべし。」とまをして、海に入りたまはむとする時に、菅疊八重、皮疊八重、絶疊八重を波の上に敷きて、其の上に下り坐しき。是に其の暴浪自ら伏ぎて、御船得進みき。爾に其の後歌ひたまひしく、

さねさし 相武の小野に燃ゆる火の 火中に立ちて問ひし君はも
とうたひたまひき。故、七日の後、其の後の御櫛海辺に依りき。乃ち
其の櫛を取りて、御陵を作りて治め置きき。〔古事記〕中巻)

古き英雄伝承の俤を伝えるヤマトタケルの物語は、わが上代の文芸の中で特異な世界を展開しているが、その中でも、このオトタチバナヒメの入水の一節は、美しくも妖しい呪的な悲話として有名である。記紀によれば、景行天皇の皇子ヤマトタケルノミコトが、父帝の命により東国征討におもむいた途次、走水の海（今の浦賀水道）で暴風に遭い難航した時、その妃オトタチバナヒメが海に入り、海神を静めたために、ミコト

の船は無事対岸に着くことができた、という物語になっている。

さまざまな形で水に入り海に沈んだ人々の話は、昔から枚挙にいとまがないが、ただ、ひと口に「入水」と言っても、その様態・理由は多様・多彩である。今、ここで考えようとするのは、古来の神話伝承の中から「入水」に関する素材を採り出して、その呪的な実態と蒼古な源流を探ろうということにある。それにはまず、広く「入水」の物語を概観して、その目的・動機によって幾つかのパターンに分類することから始めてみよう。

一、入水の類型

1 水神への生贄

先のオトタチバナヒメの物語は、『日本書紀』には、亦相模に進して、上総に往せむとす。海を望りて高言して曰はく、「是小さき海のみ。立跳りにも渡りつべし」とのたまふ。乃ち海中に至りて、暴風忽ちに起りて、王船漂蕩ひて、え渡らず。時に王に従ひまつる妾あり。弟橘媛と曰ふ。穂積氏忍山宿禰の女なり。王に啓して曰さく、「今風起き浪溢くして、王船没まむとす。是必に海神の心な

り。願はくは賤しき妾が身を、王の命に贖へて海に入らむ」とまうす。言訖りて、乃ち瀾を披けて入りぬ。暴風即ち止みぬ。船、岸に着くこと得たり。故、時人、其の海を号けて、馳水と曰ふ。

〔日本書紀〕 卷第七

とあり、『古事記』の叙述とほぼ同曲であるが、この話には、水路・航海の安全を祈つて「渡り神」または「海神」に犠牲を供したという、古い呪儀があつたことを想像させる。

『仁徳紀』によれば、難波の高津宮の周辺の堀江工事の際、茨田堤を築こうとしてすぐ壊れてしまう二箇所があつたが、天皇は夢告によつて強頸・衫子という二人を人柱として河神に捧げようとした。

即ち二人を覓ぎて得つ。因りて、河神に禱る。爰に強頸、泣ち悲しびて、水に没りて死ぬ。乃ち其の堤成りぬ。唯し衫子のみは全匏兩箇を取りて、塞き難き水に臨む。乃ち兩箇の匏を取りて、水の中に投入れて、請ひて曰はく、「河神、祟りて、吾を以て幣とせり。是を以て、今吾来れり。必ず我を得むと欲はば、是の匏を沈めてな泛ばせそ。則ち吾、真の神と知りて、親ら水の中に入らむ。若し匏を沈むることを得ずは、自づからに偽の神と知らむ。何ぞ徒に吾が身を亡ぼさむ」といふ。是に飄風忽ちに起りて、匏を引きて水に沈む。匏、浪の上に転ひつつ沈まず。則ちとく速やかに浮きおどりつつ遠く流る。是を以て、衫子、死なずと雖も、其の堤亦成りぬ。

〔日本書紀〕 卷第十一

という記録は、水神・河伯に人身御供を捧げる因習が、かなり具体的に伝えられているし、古代朝鮮の江陵の太守の妃・水路夫人が海竜にさら

われたという伝説〔三國遺事〕までが連想される。

水神に捧げる「いけにえ」といえば、巨大な大蛇に処女を供したという出雲神話のヤマタノオロチの物語もまた同系である。古来、蛇神が水神として信じられた徴証は数多いが、いわゆる神婚説話または異類婚姻譚に属する蛇神と女性との物語で、水を舞台にした話が目立つのもその理由からである。その一例を『肥前国風土記』の「褶振の峯」の伝承に見よう。大伴の狭手彦が任那に向けて船出した時、残された弟日姫子はこの峯に登つて褶を振り別れを惜しんだが、その五日後のこと、

人あり、夜毎に来て、婦と共に寝ね、曉になれば早く帰りぬ。顔かたちは狭手彦に似たりき。婦、其を恠しと思ひて、忍黙あらず、ひそかに績麻をもちてその人の衣の裾にかけ、麻のまにまに尋め往きしに、此の峯の頭の沼の辺に到りて、寝たる蛇あり。身は人にして沼の底に沈み、頭は蛇にして沼の岸に臥せりき。忽ち人と化りて即ち語りて言ひしく、

篠原の 弟姫の子ぞ さ一夜も 率寝てむ時や 家にくださむ
時に弟日姫子の従女、走りて親族に告げしかば、親族、衆を発して昇りて看るに、蛇と弟日姫子と、並びに亡せて存らず。ここに、其の沼の底を見るに、ただ、人の尻のみあり。各、弟日姫子の骨なりといひて、やがて、此の峯の南に就きて、墓を造りて治め置きき。

〔肥前国風土記〕 松浦郡

蛇神に魅入られて沼に沈んだというこの弟日姫子の物語は、蛇体神と処女とが関わり合う三輪山型神婚説話の系列に入るが、同時に、この姫

のイメージは『万葉集』(巻五)等に見える松浦佐用比売の伝承と重なり合ひ、いわゆる水神への生贄伝説として、後世の文芸に大きな影響を及ぼして行くのである。柳田国男氏が夙に『人柱と松浦佐用媛(妹の力)』で指摘されたように、古来、水神・海神・蛇神・竜神など水界の神靈に美女をいけにえとして供する話は広い分布を見せて拡散しており、叙上の弟橘姫や弟日姫子等の伝承は、その古型を明徴していると言つてよいのである。

2 隠身と自殺と

前節の「生贄」が、ある意味で強いられた形の、または献身的・自己犠牲的入水行為であつたのに対して、もっと強烈な自己否定の裏づけをもつ自殺行為の「投身」は、最も普遍的な「入水」の形だと言えるかもしれない。今、その自殺心理の追究はともかくとして、古き自発的投身と思われる物語を、この節のパターンとして括つてみた。

まず、記紀の神話で神々が海中に身を隠す描写に注意してみよう。出雲のオオクニヌシノミコト(大国主命)が、高天原の天つ神に葦原の中つ国を譲りした時、その子ヤエトシロヌシノカミが海中に身を隠すくぐり方が象徴的である。

故、爾に天鳥船神を遣はして、八重事代主神を徴し来て、問ひ賜ひし時に、其の父の大神に語りて言ひしく、「恐し。此の国は、天つ神の御子に奉らむ。」と言ひて、即ち其の船を踏み傾けて、天の逆手を青柴垣に打ち成して、隠りき。

〔古事記〕 上巻

時に事代主神、使者に謂りて曰はく、「今天神、此の問ひたまふ勅あ

り。我が父、避り奉るべし。吾また違ひまつらじ」といふ。因りて海の中に、八重の蒼柴籬を造りて、船柁を踏み避りぬ。

〔日本書紀〕 卷第二

これと同曲とも言えるのが「伊勢津彦」の物語である。『伊勢国風土記(逸文)』によれば、神倭磐余彦の天皇(神武天皇)は、大和国を平定してから、さらに東の伊勢の国を征すべく天日別命に命じて兵を進め、その国の神・伊勢津彦を帰順させ、退去を約束させた。

天日別命、問ひけらく、「汝の去らむ時は、何をもちてか驗となさむ」と言へば、啓しけらく、「吾は今夜もちて、八風を起して海水を吹き、波浪に乗りて東に入らむ。此は即ち吾が却る由なり」とまをしき。天日別命、兵を整へて窺ふに、中夜にいたる比、大風四方に起りて波瀾を打ち上げ、光耀きて日の如く、陸も海も共に朗に、遂に波に乗りて東にゆきき。古語に、神風の伊勢の国、常世の浪寄する国と云へるは、けだしくはこれ、これを謂ふなり。

〔伊勢国風土記〕 逸文

いずれの場合も、領有支配圏の明け渡しと譲渡を求められて、海中に隠遁・没入するありさまの神話表現であるが、同様に、神武天皇の兄弟たちの最期を伝える叙述もまた異様である。

故、御毛沼の命は、波の穂を跳みて常世国に渡りまし、稲水の命は、妣の国として海原に入りましき。

〔古事記〕 上巻

仍りて軍を引きて漸に進む。海の中にして卒に暴風に遭ひぬ。皇舟漂蕩ふ。時に稲飯命、乃ち歎きて曰はく、「嗟乎、吾が祖は天神、母は海神なり。如何ぞ我を陸に厄め、また我を海に厄むや」とのたまふ。

言ひ訖りて、乃ち剣を抜きて海に入りて、鋤持神と化る。三毛入野命、亦恨みて曰はく、「我が母及び姨は、並びに是れ海神なり。いかにぞ波瀾を起てて、溺すや」とのたまひて、則ち浪の秀を踏みて、常世郷に往てましぬ。

『日本書紀』 卷第三

この兄弟たちの母はタマヨリヒメ、伯母はトヨタマヒメ、いずれも海神の女たちであることが暗示的である。

これらの神々はいずれも、神話的世界の葛藤を避け、志を捨て望みを絶つて、みずからその身を海中に隠し没したというケースであり、いわば顕し身だった神の、入水による死を意味していると言つてよいであろう。神もまた入水したまう。まして人間においてをや。あるいは戦いに敗れ政争に挫折し、あるいはこの世をはかなみ、恋に破れて、さまざまの人間のドラマの中で、いかに多くの命が水の中に終焉を求めたことか。古き文学の中からその幾つかを拾い上げてみよう。

仲哀天皇の死後、皇位を窺い、神功皇后や異母弟たちを弑せんとして兵を挙げた忍熊王は、戦い利あらずして遂に、

是にその忍熊王と伊佐比宿禰と、共に追ひ迫めらえて、船に乗りて海に浮かびて歌曰ひけらく、

いざ吾君 振熊が痛手負はずは 鴉鳥の 淡海の湖に潜させなわ

とうたひて、即ち海に入りて共に死にき。

『古事記』 中巻

忍熊王、逃げて入るる所無し。則ち五十狭茅宿禰を喚びて歌ひて曰はく、

いざ吾君 五十狭茅宿禰 たまきはる 内の朝臣が 頭槌の 痛手

負はずは 鴉鳥の 潜せな

則ち共に瀬田の濱に沈りて死にぬ。(中略) 是に、其の屍を探れども得ず。然して後に、日経て菟道河に出づ。

『日本書紀』 卷第九

『古事記』では、淡海の湖(琵琶湖)、『書紀』では瀬田の川と、最期の場所の伝えこそ違え、それは敗軍の将の無念遺恨の入水であった。

同曲の話は続く。応神天皇の死後、異母弟たちとの争いに敗れた皇子・大山守命の最期も無残である。敵の伏兵があるとも知らず、謀られて宇治の川舟に乗った大山守命は、

河中に渡り到りし時、其の船を傾けしめて、水の中に墮し入れき。爾に乃ち浮かび出でて、水のまにまに流れ下りき。即ち流れて歌曰ひけらく、

ちはやぶる 宇治の渡に、棹執りに 速けむ人し 我が許に來む

とうたひき。是に河の辺に伏せ隠せし兵ひと、そなたこなた一時共に興りて、矢刺して流しき。故、訶和羅の前に到りて沈み入りき。故、鉤をもちてその沈みし処を探れば、その衣の中の甲に繋りて、訶和羅と鳴りき。故、其地を号けて訶和羅の前と謂ふ。

『古事記』 中巻

『書紀』の叙述もほぼ同様である。水中の死骸を探る鉤が、鎧に触れて「カワラ」と鳴ったという伝承があわれである。

功成らずして、激流に野望を潜めた悲運の皇子たちの物語とは別に、さまざまの想いをこめて、波の下に若い命を沈めた女性たちの哀話も多い。垂仁天皇の後宮に召された丹波のミチノウシノミコの四人の姫たちの中で、歳下の二人は「いと醜きによりて」故郷へ送り帰されたが、そ

れを恥じたマトノヒメノミコト(円野比売命)は、みずから縊死をはかって果たさず、ついに、

又、弟国に到りし時、遂に峻き淵に墮ちて死にき。(『古事記』中巻)と伝える。

そして、愛される負いめに堪えきれずに水に沈んだ勝鹿の「真間の手児奈」は、

(前略)何すとか 身をたな知りて 波の音の 騒ぐ湊の 奥津城に 妹が臥せる 遠き代に ありけることを 昨日しも 見けむがごとくも 思ほゆるかも

〔万葉集〕卷九

と追憶され、また、三人の男に想われて遂に入水したという「縊子」は、昔三人の男ありき。ともに一人の女を娵ひき。娘子嘆きて曰はく、一人の女の身は滅易きこと露のごとし。三人の雄の志は平び難きこと石の如しといふ。遂に乃ち池の上に彷徨り、水底に沈没みき。時に其の壮士ら、悲しびの至りにあへずして、各々所心を陳べて作る歌三首、無耳の池し恨めし吾妹子が来つつ潜かば水は洒れなむ

(後略)

〔万葉集〕卷十六

と哀悼されている。同じように「血沼壮士」と「菟原壮士」に愛された「葦屋処女」は、

(前略)春花の にほひ栄えて 秋の葉の にほひ照れる あたらしき身のさかりすら 丈夫の 言いたはくみ 父母に 申し別れて 家離り 海辺に出で立ち 朝夕に 満ち来る潮の 八重波に 靡く珠藻の節の間も 惜しき命を 露霜の 過ぎましにけれ 奥墓を 此処と定

めて 後の世の 聞き継ぐ人も いや遠に 偲ひにせよと 黄楊小櫛しか刺しけらし 生ひて靡けり

〔万葉集〕卷十九

と詠われている。そして、このような「妻争い」の果てに女が入水するという物語のパターンは、後世さらに定型化して、『大和物語』の、すみわびぬわが身投げてむ津の国の生田の川は名のみなりけりの歌で知られる生田川の「乙女塚」の伝説にまで流れる水脈を見せており、さらにはまた、

明け立てば、川のかたを見やりつつ、羊の歩みよりも、程なき心地す。

〔源氏物語〕浮舟

という、浮舟の入水の朝の凄艶な描写や、寄せ返る沖の白波たよりあらば逢瀬をそこと告げもしなまし 早き瀬の底の水屑となりにきと扇の風よ吹きも伝へよ

〔狭衣物語〕

という飛鳥井女君の入水の企てなど、愛の葛藤に懊悩して水界に魅入られた女性の悲話は果てしもない。

3 水葬

古くわが国の葬制に「水葬」の習俗があつたかどうかは明らかでないと言われる。しかし、古来の説話伝承には、海浜や水辺に墓地を設けたり死者を海中に放し沈めたりしたと思われる暗示的な描写が、随所にある。

たとえば、ヤマトタケルノミコトの死霊が白き鳥に化して大空に翔け去つたという『古事記』の伝えは、

是に八尋白智鳥に化りて、天に翔りて浜に向きて飛び行でましき。
とあり、それに続く、

海処行けば 腰なづむ 大河原の 植多草 海処はいさよふ
浜つ千鳥 浜よは行かず 磯伝ふ

等の歌を叙して、「是の四歌は、皆其の御葬に歌ひき。故、今に至るまで其の歌は、天皇の大御葬に歌ふなり。」とあるのは、葬送の儀に、これらの「海辺の歌」が詠われたことを想像させ、暗示に満ちていると言えよう。前出の忍熊王が、戦いに敗れて琵琶湖に入水した時の辞世と伝えられる「いざ吾君 振熊が 痛手負はずは 鳩鳥の 淡海の湖に潜きせなわ『古事記』」の歌もまた、視角によっては葬送の際の挽歌の風情がある。

ひるがえって、イザナギ・イザナミの二神が、国生みの初めに生んだみ子「ヒルコ」の叙述もまた異様である。

然れども久美度に興して生める子は、水蛭子。此の子は葦船に入れて流し去てき。
〔『古事記』 上巻〕

次に蛭児を生む。已に三歳になるまで、脚猶し立たず。故、天磐椽樟船に載せて、風のまにまに放ち棄つ。
〔『日本書紀』 卷第一〕

次に蛭児を生む。此の児、年三歳に満りぬれども、脚尚し立たず。

〔中略〕次に鳥磐椽樟船を生む。輒ち此の船を以て蛭児を載せて、水の順に放ち棄つ。
〔同前〕

『書紀』の記述の「天磐椽樟船」「鳥磐椽樟船」はいずれも『古事記』の「葦船」に対比する素朴な丸木の船とも考えられているが、一方、古

来、死者の棺のことを「フネ」と呼び、入棺を「フネイリ」と称し、その立会人を「舟人」と呼ぶ慣わしが、今でも地方に残っていることなどを考え合わせると、このヒルコの伝承は、多分に水葬の影が濃いと言つてよいであろう。そして、先のヤマトタケルノミコトの死霊が白鳥と化して翔けたという伝承を、もう一度想起するなら、ヒルコを載せた「イワクスブネ」に「天」や「鳥」の美称が冠せられているのも偶然ではない。南方では、死者を鳥の形をした舟に載せて葬送する慣わしがあるという。

鳥と葬儀との関連については、また後の章で触れるとして、話を「葦舟」「磐椽樟船」に戻して考察を進めよう。流され船の系列としては他に、わたつみの国に行ったヒコホホデミノミコト（火遠理命・山幸彦）が、海辺から乗ったという「マナシカツマノ小船」がある。

山幸彦の海宮訪問神話の序章ともいうべきこの部分は、海中の道を辿つてこの世ならぬ異郷へ旅立つパターンとして、ヒルコの葦船などとも共通した想念を見ているが、『古事記』には、

爾に塩椎神、「我、汝命の為に善き議を作さむ」と言ひて、即ち无間勝間の小船を造り、其の船に載せて、教へて曰ひしく、「我其の船を押し流さば、やや暫し往でませ。味し御路あらむ。乃ち其の道に乗りて往でませば、魚鱗のごと造れる宮室、それ綿津見神の宮ぞ。」〔後略〕とある。『書紀』には、

乃ち無目籠を作りて、彦火火出見尊を籠の中に内れて、海に沈む。

〔卷第二〕

因りて其の竹を取りて、大目籠籠を作りて、火火出見尊を籠の中に内れまつりて、海に投る。一に云はく、無目堅間を以て浮木に為りて、細繩を以て火火出見尊を繫ひ著けまつりて沈む。(同前一書)

乃ち無目堅間の小船を作りて、火火出見尊を載せまつりて、海の中に推し放つ。則ち自然に沈み去る。(同前一書)

等とある。

固く編んだ竹籠の内側から粘土を押し貼って水に浮かべる「籠舟」は、かつて南方諸国で使用されたというが、古く、これらの籠舟や葦船に死者を載せて、海に流し沈めたかもしれない風習が浮かび上がってくる。中世以降の民譚「かちかち山」の狸が「土舟」と共に沈められる話なども、この流れの後世的屈折表現かもしれないと考えるのは飛躍にすぎるのであるうか。いずれにしても、ヒルコを入れて「流し去て」「放ち棄て」た「葦舟」や「磐櫂樟船」も、ヒコホホデミを載せて「押し流し」「推し放し」「海に沈め」た「マナシカタマノ小船」も、死者を海に流し沈めた水葬の棺であったかもしれないという印象を否むことができないのである。

『播磨国風土記』に、景行天皇の皇后印南の別嬪の「褶墓」の伝承がある。

年ありて、別嬪この宮に薨りまししかば、やがて墓を日岡に作りて葬りまつりき。其の屍を挙げて、印南川を度る時、大き飄、川下より来て、其の屍を川中に纏き入れき。求むれども得ず。ただ匣と褶とを得つ。即ち、此の二つの物もちて其の墓に葬りき。故、褶墓と号く。

(『播磨国風土記』 賀古郡)

つむじ風が屍を川に巻き込んだという描写は、前節で触れた「河神と犠牲」の話との相関なども考えられるが、この、川の中に死体を見失ったというパターンは、前出の忍熊王や大山守命の入水および遺体捜索の話と共通である。また、死骸が川に沈んだというこの伝承は、
楽浪の志賀津の子らが罷道の川瀬の道を見ればさぶしも

(『万葉集』 卷二)

の歌などと照合する時、意味が深い。この「罷道」とは葬送の道の意であり、「葬送の道の川瀬の道」という想念は、単なる偶発表現ではなく、川と水死と葬儀との古き觀念を暗示していると言えよう。

このように考えてくると、直接「水葬」という描写に至らぬまでも、「水辺と死」との関連は密接である。

沖つ波来よる荒磯を敷栲の枕と枕きて寝せる君かも(『万葉集』 卷二) は「讚岐の狭岑島に石の中に死れる人を視て」詠じた柿本人麿の長歌の反歌であり、

風速の美保の浦廻の白つつじ見れどもさぶし亡き人思へば

(同前 卷三)

は「河辺宮人、姫島の松原に美人の屍を見て哀慟びて」作った歌。そして、

潮気立つ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹が形見とそ来し

(同前 卷九)

は紀伊国で、

八雲さす出雲の子らが黒髪は吉野の川の沖になづさふ(同前 卷三)

は、「溺れ死にし出雲娘子を吉野に火葬する時」いずれも柿本人麿の作った挽歌である。おちこちの海辺の荒磯に、そして吉野の谷川に、いわれも知らず水に死んだ乙女たちへの悲歌が揺らぎ続ける。

4 配流

『竹取物語』のかぐや姫は、月の世界で「いささかの罪作りたまへるによりて」、つまり天上界の罪びととして、その償いのためにこの下界に落し流された小さ子であった。あれが天界の流人であるなら、水界の流人の俤もまた、水に流れ、水に入り、水を渡るといふさまざまの形で、古来の文学に濃い影を落している。

『延喜式』には「流罪」について、

凡流移人者。省定ニ配所申上官。具録ニ犯状ニ下符所在併配所。良人請内印。賤
隸請外印。 其路程者。從レ京為レ計。伊豆。去京七百七十里。 安房。一千二百九十里。 常陸。一千五百七十五里。 佐渡。一千三百廿五里。 隱岐。九百一十里。 土佐等国。一千二百廿五里。 為レ遠流。一
 信濃。五百六十里。 伊予等国。五百六十里。 為レ中流。越前。三百一十里。 安芸等国。四百九十里。 為レ近流。一
 (『延喜式』 卷二十九 刑部省)

として、「遠流・中流・近流」が規定されているが、罪の軽重によって配流の距離が決められるようになる以前の遠い昔は、距りの遠近よりもむしろ、この世ならぬ遠絶の異郷への隔離感が強く想念されていたと考えられる。

記紀の神話で、出雲の海辺に漂着したスクナビコナノカミは、大国主の神との国土経営の果てに、粟茎に登りはじかれて常世の国に渡ったとも伝えられているが、この小さ神は『書紀』の一書によれば、

時に、高皇産靈尊、聞しめして曰はく、「吾が産みし児、凡て一千五百座有り。其の中に一の児いと悪くして、教養に順はず。指間より漏き墮ちにしは、必ず彼ならむ。愛みて養せ」とのたまふ。
 (『日本書紀』 卷第二)

つまり父神の意に背き抗してこの世に墮ちた罪の子でもあった。

柳田国男氏や折口信夫氏が説いた「流され王」「貴種流離譚」等は、日本文学における貴人の地方流離の類型を看取しているが、前節で扱ったヒルコの流離も、山幸彦の海路の旅も、視点を変えれば配流の影濃い物語と見なすことができる。特に山幸彦は、兄・海幸彦のサチ「釣鉤」を海に失ない、その賠償のため剣を砕いて五百本・千本の鉤を作り返そうとして許されず、万策つきて海辺に放浪し、ついに海彼のわたつみの国にまで流れてゆくのであるが、それはまた、ひとから預かった貴重なサチを遺失した罪の償いの旅でもあった。

流浪の果てに行きついた異郷わたつみの国で、山幸彦は、海神の女トヨタマビメと婚することになるが、配流の地でその土地の女性と結ばれた流人の話は数多い。それはたとえば、『源氏物語』の光源氏と明石の上のロマンなどに象徴されつつ、後世の史実・伝承を綯いませて多彩である。

しらざりし大海の原に流れきてひとかたにやは物は悲しき

(『源氏物語』 須磨)

薩摩瀉沖の小島にわれありと親には告げよ八重の潮風

(『平家物語』 卷第二)

こうして、罪を得て遠島・配流された人々の悲歌と哀話は限りもない。しかもそれが、茫洋たる海原を越えた絶海の孤島などであれば、なおさらその特性は顕著である。そしていずれも、海彼の異郷への隔絶感と孤寥感を漂わせつつ、美しき贖罪の世界を描いているのである。

5 みそぎ

水に潜り、水に沈み、水を浴びて、罪けがれを浄化するという神話伝承もまた、いわゆる「みそぎはらい」の理念を含んで強い流れを見せている。

死界・黄泉国から逃げ帰ったイザナギノミコトは、筑紫の日向の橘の小戸の櫛原あはぎはらでその身を濯いで「穢き国」のけがれを祓い浄めようとした。

是に詔りたまひしく「上の瀬は瀬速し。下の瀬は瀬弱し。」とのりたまひて、初めて中の瀬に墮りかづきて滌ぎたまふ時、成りませる神の名は、八十禍津日神。次に大禍津日神。〔古事記〕上巻

ここで「墮り潜く」とは海水にもぐる意であるが、『日本書紀』ではこのくだりが、

乃ち興言して曰はく、「上つ瀬は是太だ疾し。下つ瀬は是太だ弱し」とのたまひて、便ち中つ瀬に濯ぎたまふ。(中略)又海の底に沈き濯ぐ。(中略)又潮の中に潜き濯ぐ。(中略)又潮の上に浮き濯ぐ。

〔日本書紀〕卷第二

時に、水に入りて、磐土命を吹き生す。水を出でて、大直日神を吹き生す。又入りて、底土命を吹き生す。出でて、大綾津日神を吹き生す。又入りて、赤土命を吹き生す。出でて、大地海原の諸の神を吹き生す。

〔日本書紀〕一書 卷第二

となつてゐる。「水に入りて——水を出でて——又入りて——出でて——又入りて——出でて」というこの描写の何と懇切なことか。そして、この水中の浄化が身心の再生と甦りを期した呪儀であれば、それは一旦水底に沈んで穢身として死んだ肉体が、再び浮き上がることによって浄身として蘇生する、という理念があつたはずである。マガツビ・ナホビという濁穢と浄化の神格がここに生まれたという神話もそれを裏づける。水に潜り沈むことによって浄化を期する行為は、前節の「投身」の想念と微妙に重なり合うことがある。サルタヒコノカミが海に溺れた時の様子を『古事記』は、

故、その猿田毘古の神、阿邪訶に坐す時、漁して、比良夫貝にその手を咩ひ合はさえて、海塩に沈み溺れたまひき。故、其の底に沈み居たまひし時の名を、底度久御魂と謂ひ、其の海水のつぶたつ時の名を都夫多都御魂と謂ひ、其のあわさく時の名を、阿和佐久御魂と謂ふ。

〔古事記〕上巻

と誌しているが、人が溺れ苦しむさまを、水の深淺によつて描き分ける手法は、みそぎの描写と無縁ではない。そして同様のケースは、海幸彦が弟の山幸彦の宝珠の呪力により海水に溺れ苦しんで遂に帰順する時の芸態の描写で、いっそう象徴化されていると言つてよい。それはまぎれもなく、水死を前提とした「贖罪—浄化—蘇生—復活」への理念であつた。もともと禊祓とは、身心の再生と復活を期した水の呪儀であつたが、それはまた、穢身とともに水中に葬り去る罪けがれへの、仮借ない滅除

と根絶にあつた。さればこそ「大祓」の祝詞は、この世の罪穢を川から海へ、さらに海の底へと、徹底的に追いつめ消滅させようとする執念に満ちていると言ってもよい。この世のありとあらゆる罪けがれを、さまざまな祭儀によって祓い清めて「天つ祝詞の太祝詞事」を宣れば、天つ神・国つ神はそれを聞こしめし嘉したまうであらう。されば「天の下四方の国には、罪といふ罪はあらじ」と、追放・消除された罪けがれは何処に行くのか。

(前略) 遺る罪はあらじと祓へたまひ清めたまふことを、高山・短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬に坐す瀬織つひめといふ神、大海の原に持ち出でなむ。かく持ち出で往なば、荒塩の塩の八百道の、八塩道の塩の八百会に坐す速開つひめといふ神、持ちかか呑みてむ。

かくかか呑みては、氣吹戸に坐す氣吹戸主といふ神、根の国・底の国に氣吹き放ちてむ。かく氣吹き放ちては、根の国・底の国に坐す速さすらひめという神、持ちさすらひ失ひてむ。かく失ひては、天皇が朝廷に仕へまつる官官の人どもを始めて、天の下四方には、今日より始めて罪といふ罪はあらじと、(後略)

何と徹底した「祓ひ清め」の執念であることか。そして、罪穢れが水の流れとともに浄化消滅していく過程を、これほど美しく神話化している詞章も珍らしい。

視角を変えて、古来の白鳥処女説話(羽衣伝説・天人女房譚)に見られる神女または天女の水浴の描写が、聖なる巫女のみそぎの様相を反映しているという見方があることは、あらためて説くまでもない。一例を

挙げるにとどめよう。

丹後の国丹波の郡。郡家の西北の隅の方に比治の里あり。此の里の比治山の頂に井あり。其の名を真名井といふ。今は既に沼となれり。此の井に天女八人降り来て水浴みき。時に老夫婦あり。其の名を和奈佐の老夫・和奈佐の老婦といふ。此の老等、此の井に至りて、ひそかに天女一人の衣裳を取り隠しき。やがて衣裳ある者は皆天に飛び上りき。ただ、衣裳なき女娘一人留まりて、即ち身は水に隠して、独り愧ち居りき。(後略)

〔丹後国風土記〕 逸文)

なお、「白鳥処女」に象徴される水鳥たちが、これら入水の系譜に密接に係わり合っていることは、後章で述べる。

6 往生

海水浄化の理念が、仏教思想と結びついて説話的に表現されると、そこに独特の入水の世界を描き出す。

天竺の天狗が、海水の鳴る音に「無常偈」を聞き、その水音を尋ねてはるばると日本までたどりついたという説話(『今昔物語』巻第二十)は象徴的である。同様に、海中に仏教の樂の音が聞こえたという記録が『欽明紀』に見える。

河内国言さく、「泉郡の茅渟海の中に、梵音す。震響雷の声のごとし。光彩しく晃り耀くこと日の色の如し。」天皇、心に異しびたまひて、池辺直を遣はして、海に入りて求訪めしむ。(『日本書紀』卷第十九)

『日本靈異記』にも同じ伝承があり、いずれも海潮に対する古い浄水の想いが、仏教の聖水思想と習合したと見るのが妥当であろう。

仏の像を「難波の堀江」に流し捨てたという記述が、同じ『欽明紀』にあるが、同曲の伝承は『元興寺縁起』にも見える。しかし、同じ事件を誌した後世の『平家物語(善光寺炎上)』や『善光寺縁起』に、仏像を堀江に流し棄てたことを伝えていないのは、仏像が安住するに応わしい海中浄土的信仰がしだいに薄れて、流し棄てられたことへの不敬と忌憚の比重が強まってきたためであろうか。

とはいえ、海が仏の浄土への道である、という想いは、後世の文献にもなお随所に見ることが出来る。平家一族の滅亡の悲劇を奏でる「壇の浦の合戦」の描写には、幼帝安徳を抱いた二位の尼が「是は西方浄土へとて、海にぞ沈みたまひける。〔平家物語〕 卷第十二」とあり、『今昔物語』その他には、極悪非道の五位の侍が、ある時、講師の説法を聞いて衆人の中で突如として改心し、一念発起して直ちに出家し、一途に阿陀弥仏を求めて西へ西へとまっすぐに歩み続け、ついに西海に臨んだ峻しい峯の頂きの巨木の股に登って、阿弥陀の名号を呼び続けながら息絶えたという話がある。

(前略) 其ノ峯ニ登リテ見レバ、西ニ海現ニ見ユル所アリ。其ノ所ニ二股ナル木アリ。其ノ股ニ入道登リ居テ、金ヲ叩キテ、「阿弥陀仏ヨヤ、オイオイ」ト叩キ居タリ。住持ヲ見テ喜ビテ云ハク、「我、ナホココヨリ西ニモ行キテ、海ニモ入りナムト思ヒシカドモ、ココニテ阿弥陀仏ノ答ヘ給ヘバ、ソレヲ呼バヒ奉リ居タルナリ」ト。住持、コレヲ聞キテ奇異シト思ヒテ、「イカニ答ヘ給フゾ」ト問ヘバ、サラバ呼バヒ奉ラム。聞ケ」ト云ヒテ、「阿弥陀仏ヨヤ、オイオイ。イヅコニオハ

シマス」ト叫ベバ、海ノ中ニ微妙ノ御声アリテ、「ココニアリ」ト答ヘ給ヒケレバ、入道、「コレハ聞クヤ」ト云フニ、住持、コノ御音ヲ聞キテ、悲シク貴クテ、臥シマロビ泣クコト限リナシ。(後略)

〔今昔物語〕 卷第十九

西方の海の中から仏の声が聞こえたというこの一節に象徴されている発想は、同時に、浄土への波路はまた、無常の穢土と絶縁する厭離の旅でもあったと想念され、

法師にやなりにけむ、身をや投げてけむ。
〔大和物語〕

或ル山ノ中ニ上人アリ。道心深クシテ、ウキ世ニ心ヲトメズ急ギ極楽ヘマイラムト思ヒケレバ、入水ヲシテ、死ナムト思ヒ立チテ、同行ヲ語ラヒテ、船ヲ用意シテ、水海ノアリケルニコギ出デス。
〔沙石集〕 卷四

などの厭世出離の想いに傾斜し、

生死の大海辺無し、仏性真如岸遠し、

妙法蓮華は船筏、来世の衆生渡すべし。
〔梁塵秘抄〕 卷三

の如き、慈悲の浄海信仰を定着させていくのである。

二 異郷への水路

前章では、古来の神話伝承に描かれた「入水の文学」の源流を探り、その多彩な世界を整理してみたのであるが、この章では、そのそれぞれのパターンに共通する性格と理念を考えてみたい。

〔伊勢国風土記〕 逸文)

まず、この世の浜辺にうち寄せる波は、遙かな、この世ならぬ異郷へ
 続く潮路でもあった。それはまた、万波果てなき大海原のあなたに、あ
 るいは底ひも知れぬわたつみの深みに、在ると信じられた遠絶の異土へ
 の、望郷と憧憬であった。

茫洋たる大海が果てしもなくうねり続いて、かそかなる蒼みの水平の
 一線を境に、そのまま青雲の向伏す大空に連なり昇らんとするあたり、
 人智を絶した異界への想念が、渦潮のように古代人の夢をかき立てたの
 でもあろうか。それなるがゆえに、そこには、ヒコホホデミが「味し御
 路」の潮流に乗って訪れたという「恒は嘆かすこともなき」楽土・わた
 つみの国があり、また、めずらかなる小さ子神たちの故郷とも言われ、
 浦島子が訪れたとも伝えられた不老と豊饒の仙郷・常世の国があるはず
 でもあった。

1 楽土への海路

出雲国の美保の崎〔書紀〕では五十狭狭の小江に漂着した小さ子神スク
 ナヒコナは、最後に、

其の後に、少彦名命、行きて熊野の御碕に至りて、遂に常世郷に適し
 ぬ。亦曰はく、淡島に至りて、粟莖に縁りしかば、弾かれ渡りまして
 常世郷に至りましきといふ。
 〔日本書紀〕 卷第二)

と伝えられているし、また前章の「隠し身」の所で引いた「伊勢津彦」
 の最後は、

遂に波に乗りて東にゆきき。古語に、神風の伊勢の国、常世の浪寄す
 る国と云へるは、蓋しくは此れ、これを謂ふなり。

とあった。『垂仁紀』によれば、常世国へ往ったタジマモリは、

命を天朝に受りて、遠くより絶域に往る。万里波を踏みて、遙
 かに弱水を度る。是の常世国は、神仙の秘区、俗の臻らむ所に非ず。
 是を以て、往来ふ間に、自づからに十年になりぬ。(後略)

〔日本書紀〕 卷第六)

と語ったと伝えられる。念のため、仙郷訪問説話の代表ともいうべき
 「浦島子」の伝承の「入水」の部分を中心に抜き書きしてみよう。まず
 『丹後国風土記』には、

〔前略〕 嶋子、独り小船に乗りて海中に沈び出でて釣するに、三日三夜
 を経るも、一つの魚だに得ず、乃ち五色の亀を得たり。心に奇異しと
 思ひて船の中に置いて、やがて寝るに、忽ち婦人となりぬ。其の容美
 麗しく、更比ふべきものなかりき。(中略) 女娘曰ひけらく、「君、棹を
 廻らして蓬山に赴かさね」といひければ、嶋子、従きて往かむとす
 るに、女娘、教へて目を眠らしめき。即ち不意の間に海中の博く大き
 なる嶋に至りき。其の地は玉を敷けるが如し。関台は暎映く、楼堂、
 は玲瓏きて、目に見ざりしところ、耳に聞かざりしところなり。(後略)

〔丹後国風土記〕 逸文)

そして、物語の終りに島子と神女とが詠んだという、

常世べに 雲立ちわたる 水の江の 浦嶋の子が 言持ちわたる
 大和べに 風吹きあげて 雲放れ 退き居りともよ 吾を忘らすな
 子らに恋ひ 朝戸を開き 吾が居れば 常世の浜の 浪の音聞こゆ

等の歌が続く。長大かつ華麗な美文調である。

これにくらべて『日本書紀』の記述は簡潔である。

秋七月、丹波国の余社郡の管川の人瑞江浦嶋子、舟に乗りて釣す。遂に大亀を得たり。便ちに女に化為る。是に、浦嶋子、感りて婦にす。相逐ひて海に入る。蓬萊山に到りて、仙衆を歴り観る。

〔日本書紀〕 卷第十四

そして『万葉集』には、

春の日の霞める時に 墨吉の岸に出でゐて 釣船のとをらふ見
れば 古の事ぞ思ほゆる 水江の浦島の子が 堅魚釣り 鯛釣り
矜り 七日まで 家にも来ずて 海界を 過ぎて漕ぎ行くに 海若の
神の女に たまさかに い漕ぎ向ひ 相詠ひ こと成りしかば かき
結び 常世に至り 海若の 神の宮の 内の重の 妙なる殿に 携は
り 二人入り居て 老いもせず 死にもせずして 永き世に ありけ
るものを(後略) 〔万葉集〕 卷九

と詠われている。なおこの歌には「墨吉の岸に出でゐて」浦島子の故事を思い出した、とあるが、前出のイザナギノミコトがみそぎした時生まれた神々の中に「墨江の三前の大神(撰津の住吉大神)」があったが、この「墨江」の符合は暗示的である。撰津から難波にかけての浦が、古き聖水のルートの一つであったことについては後で触れる。

同じように、イザナギノミコトがみそぎした「筑紫の日向の橘の小戸の憶原」という海は、後にヒコホホデミノミコト(山幸彦)が、海神の国へ往くため海中に入ろうとする時、策を授けた「八尋ワニ」の棲みか

でもあったという(『書紀』)。つまり、あのみそぎの海辺は、同時に、わたつみの国に通ずる聖なる「入水の浜」でもあったということを見逃すわけにはいかない。

こうして、筑紫や出雲や丹後の、そして撰津や熊野や伊勢の、美しく神さびた浜辺には、常世の波がうち寄せ、常世に通ずる水路が開き、めづらかな小さが漂着し、そして、常世べに雲立ち渡る聖地であったと信じられていた。それゆえ、それらの土地が、由緒深き古社を鎮め、神話を伝える信仰の地であったことは偶然ではなかったのである。

2 死界への水路

海原の果て、わたつみの底に「異郷」があるという空想は、しかし、不老不死の仙郷ばかりを想定したわけではない。もともと「常世」というイメージは、富と不死の楽土だけではなく、むしろ暗き「常夜」の陰影をもった死界の観念が原義であったとも言われている。

すでに前章でも指摘したように、異郷の観念は、一旦印象を転換すれば「楽土」と「死界」という観念の両極が、表裏のように密着していたのである。そこから、底も知れぬ蒼溟の水の奥は、美女のいけにえを求め、海神や竜神の棲みかでもあり、その深い澁みの闇は、「常夜」の死者の国とも想念されたのであった。

ミケヌノミコト・イナヒノミコト・忍熊王・大山守命など、悲運の皇子たちが、若き命を水に沈めて往ったのも、そのような亡き「妣が国」であり、水底の死界であった。

出雲の八重事代主神や、伊勢の伊勢津彦が、波を分け波に乗って去っ

たのも、この水界であったはずだし、ヒルコや山幸彦が、流され沈められた波路も不気味であった。

それかあらぬか、楽土・常世の国からこの国に無事立ち戻ってきた人々も、やがてまもなく命終わってしまったという伝承の、何と暗示的なことか。常世からこの世に戻ってきたあの浦島子も、

(前略) 墨吉すみよしに 還り来りて 家見れど 家も見かねて 里見れど 里も見かねて 恠あやしと そこに思はく 家ゆ出でて 三歳さんざいの間に 垣も無く 家滅うせめやと この箱を 開きて見てば もとの如 家はあらむと 玉篋たまぐしげ 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世辺に 棚引きぬれば 立ち走り 叫び袖振り 反転び 足ずりしつつ たちまちに 情消こころけうしせぬ 若かりし 膚はだも皺しわみぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆなは 気いきさへ絶えて 後つひに 命死にける 水江の 浦島の子が 家地いへじち見ゆ

『万葉集』 卷九

と詠われた。最後は「気さへ絶えて 後つひに命死にける」という伝承は無残である。同じように、垂仁天皇のみ代に常世の国に赴き、「トキジクノカクノコノミ」を持ち帰ったタジマモリも、そのまま、天皇の墓前で「遂に叫び哭きて死にき(記)」、または「叫び哭きて自ら死れり(紀)」と伝えられているではないか。二人とも、あたかも常世の聖域の禁呪を侵した祟りでもあるかのように、この世に帰り着くやいなや絶命したというのである。

それゆえ、古き挽歌の詞書に、

しかれども医薬験なくして、逝く水留まらず。これに困りて悲しび慟

きて、即ちこの歌を作る。

『万葉集』 卷三

の「逝く水留まらず」は、決して死の象徴的な表現とのみ解すべきではなからう。また、後世の「ゆく川の流れば絶えずして、しかももとの水にあらず。『方丈記』」という想念も、単なる中世的無常感の次元だけであるはずもない。それは、前章で引いた『大祓』の祝詞に強烈に打ち出されている「川から海へ、そして深海の底へ」という、遙かなる水路への古き想念に源を発しているのではなからうか。「流のまにまに放ち棄て」られたヒルコの辿った水路も、例外ではない。

海辺の磯穴が、そのまま地下の黄泉国に続くと信じられた話が『出雲国風土記』にあるが、イザナギノミコトが黄泉国から逃げ帰る途中、尿が化して流れたという「巨川(『神代記』)」も、後世の地獄の思想の中で強調された「三途の川」も、いずれも古き死界の水流の想念を暗示している興味深い。たとえば『日本霊異記』に見える閻羅王の宮殿への境界は、往く前の道、中断えて深き河あり。水の色黒くして流れず、沖く寂びたり。(中略)前に立てる人の言はく、「汝、此の河に没り、能くわが蹤を踐め」といひて、躑を踏みて度らしむ。(下巻 第九話)

のように、いずれも「大河」によって遮断された絶域として描かれる。そして、

玉梓たまぼこの 道行く人は あしひきの 山行き野行き にはたづみ 川行
き渡り 鯨魚いさな取り 海道に出でて 畏きや 神の渡わたりは 吹く風も 和なご
には吹かず 立つ波も 凡おほには立たぬ とる波の 立ち塞さふ道を 誰
が心 いたはしとかも 直渡ただりけむ 直渡りけむ

水死した人を悼んで詠んだこの歌の、何と異様なことよ。それは、死界への水路をひそかに示した道しるべでもあろうか。

3 秘めたる聖流

ここまで考えてくると、遙かなる海路の彼方の異郷とは、その想念の両極に、仙界と死界のイメージを対照的にきわ立たせながら、しかし時によつては、その両界の映像は重なり合つて、必ずしも截然かつ合理的に区別されていたわけではなかったことがわかる。

古く「常世」と「常夜」の印象が重複したように、そして、仏教信仰などに端的に象徴されるように、古来「死」とは、楽土と冥土のいずれへの旅立ちをも意味して考えられていたのである。前章でも触れたように、「往生」とは、欣求浄土の彼岸への願望であり、同時に厭離穢土の出離の絶命でもあった。

そして、楽土にせよ冥土にせよ、この世の時空を超えた異次元の別世界に赴くには、幾つかの秘めたるルートを通つて行かなければならないと信じられていたのである。

わが古来の神話伝承の中に、多彩に描かれる「秘めたる水路」は、それら異郷に通じる神秘的な通路の一つであった。「魚鱗のごと造れる宮室」わたつみの神の宮を訪れた麗わしき若神ヒコホデミは、「マナシカツマの小舟」に載り、海流の「ウマシ御路」に乗つたと伝えられているし、常世の国に赴いたタジモリは、「万里浪を踏みて、遙かに弱水を渡る『垂仁紀』」とあった。わたつみの神の女トヨタマビメは、夫ヒコホ

ホデミと別れる時、「妾、恒は、海つ道を通して往来はむと欲ひき。然れども吾が形を伺見たまひし、これいとはづかし。『古事記』」と言ひ残して、「海坂を塞へ(記)」「海途を閉ちて(紀)」海の底に返り入つてしまつたと伝える。また、水江の浦島子は、「海界を過ぎて漕ぎ行」きて、海若の神女に遭ひ常世に往つたと伝えるし、さらには水死人を見て死界への水路を詠つた挽歌『万葉集』 卷十三もあった。

前述した『大祓祝詞』に見られる、川から海へという禊祓の水流は、ついに深海の底から地軸の絶域にまで通じる秘路であつたが、あの祝詞の詞章の中で、早川の瀬にいて罪けがれを大海原に運び去る役の「瀬織津媛」という女神の信仰は貴重である。『近江国風土記(逸文)』によれば、

近江の風土記に曰はく、八張口の神の社。即ち、伊勢の佐久那太李の神を忌みて、瀬織津比咩を祭れり。

とある。「八張口」とは滋賀県大津市にある佐久奈度神社で、琵琶湖から瀬田川への急流の落ち口に祀られたのが、この瀬織津媛だといふのである。つまりこの女神は、近江の湖の南端の落ち口にいて、そこから「瀬田川―宇治川―淀川―難波の海」へと続く、聖なる水流のルートを司つていた神であつた。そしておもしろいことに、後世、この水路を全く逆に、海から川へ、そして湖へと遡上する話が、前述『今昔物語』の天竺の天狗の物語である。この天狗は、海の水一筋に「無常偈」の音の鳴るのを聞いて、震旦(中国)からわが国の博多に、さらに門司の関から瀬戸内を通つて難波の浦から淀川に入り、宇治川を遡つて瀬田川から琵琶湖

に上り、比叡山から流れ出る一つの川に尋ね入ったというのである（『今昔物語』 卷第二十）。仏教的色彩が濃厚ながら、大赦の祝詞とは全く逆のコースで、聖水流を描いているのが興味深い。

この琵琶湖について『梁塵秘抄』には、

近江の湖は海ならず 天台薬師の池ぞかし 何ぞの海 常楽我浄の風
吹けば 七宝蓮華の波ぞ立つ
（卷第二）

と詠じて、浄湖の信仰をも伝えていたのであるが、しかし、琵琶湖がどのように聖なる湖水と信じられたのは、単にその西岸の峰々に延暦寺・園城寺等の名刹が草創されてからの仏教信仰だけによるものではない。古く琵琶湖を中心とする近江国周辺の信仰と伝承は、たとえば「淡海の多賀に坐す（記）」と伝えられるイザナギノ大神の信仰を始め、伊吹の山の神の毒気に斃れたヤマトタケルノミコトの伝承、さらに『近江国風土記』に見られる伊吹の山の神たちの山の丈競べ伝説と竹生島の発祥説話や、伊香小江（余呉湖）にまつわる天人女房譚など、その源流は遠く豊かである。

つまり、『今昔物語』に伝えられた天竺の天狗の辿った水路とは、古く琵琶湖に源を発する聖なる水流信仰の逆のルートの伝承化にすぎないことが理解できるであろう。そして、かの反逆の皇子たち、忍熊王・大山守命や、『源氏物語』の浮舟の入水の地が、いずれもこの水路の琵琶湖・宇治川であったことも象徴的である。『日本霊異記』には、琵琶湖畔の「志賀の唐崎」から地獄の閻羅王の使いの鬼に尾行され、「山城の宇治橋」で追いつかれたという男の話（中巻 第二十四話）があり、このル

ートはまた、地獄への死の水路の印象を伝えていたことがわかる。

先に触れた『出雲国風土記』の、海岸から黄泉国に通ずる洞穴の伝承は、

磯より西の方に窟戸あり。高さ広さと各六尺ばかりなり。窟の内に穴あり。人、入ることを得ず。深き浅きを知らざるなり。夢に此の窟の窟の辺に至れば必ず死ぬ。故、俗人、古より今に至るまで、黄泉の坂・黄泉の穴と号く。
（『出雲国風土記』 出雲郡）

とあったが、同様に、聖なる流れは地下水となって、大地の底をも貫流すると信じられた。奈良・東大寺二月堂の「お水取り」の行事は、古き水の信仰のなごりを伝えて有名であるが、あの堂前の「若狭井」の水は遠く若狭国（福井県）遠敷川の鵜の瀬の淵の水源に通じていると信じられた。それゆえ、お水取りの行事の間は、遠敷神社の前の川の瀬音が止むという「音無川」の伝説をさえ生んだが、今も福井県小浜市の郊外、神宮寺の南を流れる遠敷川の上流鵜の瀬の河原で、毎年三月初め「送り水の神事」が催されるのも、この聖流信仰の根深い伝統を象徴しているのと言えよう。

三 入水の鎮魂——その儀式と芸能——

さまざまに視野を拡散させてきたが、結局、吉きにせよ凶しきにせよ、「入水」とは、現世からの離脱・絶縁であり、何らかの形で現状否定の手段であった。それはまた、めざす異郷が楽土であれ、また冥土であれ、ともかくにも、この世を否み、今の己れの現の命を捨てて、幽

明の境を越え、転生のよすがにしたいと希う想いを、「水」の媒介に求めた行為だったとも言えよう。

この章では、さまざまな入水の方法と、そのあり方について考察してみよう。たとえば、イザナギノミコトの禊祓の情景では、①準備。(身につけているものを次々に投げ棄てる。杖・帯・囊・衣・禪・冠・手纏) ②水に潜る場所。(中つ瀬―水底―水面) ③洗う部位。(身―目―鼻) というように、その描写が実に懇切・詳細である。もちろん、これらの神話には、古きみそぎの行事の儀式・作法が投影しているはずであり、これまでのさまざまの入水の描写の裏づけになっている原始祭儀の様相も靡ろに浮かび上がってくるのである。

1 入水の準備

すでに見てきたように、入水に先立っての準備・用意の説明描写は、かなり綿密・克明な場合が多い。イザナギノミコトのみそぎの叙述は別格としても、他にも、たとえばヤエトシロヌシノカミの入水の有様は、即ち其の船を踏み傾けて、天の逆手を青柴垣に打ち成して、隠りき。

〔古事記〕 上巻

因りて海中に、八重蒼柴籬を造りて、船柁を踏みて避りぬ。

〔日本書紀〕 卷第二

とあったが、「足を踏み、手を打ちつつ」水に入るといふこれらの描写は、何か呪的な儀礼の所作を想像させるではないか。次いで、ヒコホホデミが海に入る時の様子をもう一度引用すると、

无間勝間の小船を造り、其の船に載せて、

〔古事記〕

乃ち無目籠を作りて、彦火出見尊を籠の中に内れて、海に沈む。

〔日本書紀〕

即ち囊の中の玄櫛を取りて地に投げしかば、五百箇竹林に化成りぬ。因りて其の竹を取りて、大目籠籠を作りて、彦火出見尊を籠の中に内れまつりて、海に投る。一に云はく、無目堅間を以て浮木に為りて、細繩を以て彦火出見尊を繫ひ著けまつりて沈む。(同前 一書) 乃ち無目堅間の小船を作りて、彦火出見尊を載せまつりて、海の中に推し放つ。則ち自然に沈み去る。(同前 一書)

と、これまた詳細を極める。

さらに、かのオトタチバナヒメの入水の場合は、

海に入りたまはむとする時に、菅疊八重、皮疊八重、純疊八重を波の上に敷きて、其の上に下り坐しき。

〔古事記〕

とあった。これは一体、何の儀式であろうか。「菅疊八重、皮疊八重、純疊八重」と、「八重」を繰り返して、海神に生贄を捧げるかの如き不気味な儀式を伝えているが、因みに、ヒコホホデミがわたつみの神の宮を訪れた時、海神は、

即ち内に率て入りて、美智の皮の疊八重を敷き、亦純疊八重を其の上に敷き、其の上に坐せて、百取の机代の物を具へ、御饗して、即ち其の女豊玉毘売を婚せしめき。

〔古事記〕

とあった。「美智」とは海獣アシカのこと。いずれの場合も、単に敷物を何枚も重ねての威儀・饗宴だけではなく、それらが古き海神信仰に関する呪儀の描写であったことを思わせる。

なお、このオトタチバナヒメの物語から連想されるのが、入水とは無縁ながらスサノオノミコトのヤマタノオロチ退治の条である。年ごとに「稚女を喫ひ」に来るヤマタノオロチを待ち構えるスサノオノミコトは、翁と嫗に指示して、

汝等は、八塩折の酒を醸み、亦垣を作り廻し、その垣に八門を作り、門毎に八佐受岐を結び、其の佐受岐毎に酒船を置いて、船毎に其の八塩折を盛りて、待ちてよ。
 (『古事記』)

と命じたとある。この二つの話に共通するのは、若き美女を生贄として捧げる古き祭儀の傍であるが、それとともに、その儀式の克明なまでの描写が注目される。特に「八」という美称をくり返しながら、整々と呪儀を進める手順・次第が幻の神楽のように想像できるではないか。海神も蛇神も、古く水神としての共通項で想念されたことは、前に触れた。

2 水中の儀法

先に「みそぎ」の条で、イザナギノミコトが海水に潜って、水の底・中・上でその身を濯いだとあり、その深淺に依じて、それぞれの化した水神・海神たちが成り出た、と伝えられている。『日本書紀』ではこの叙述を、「沈・濯・於・海底」「潜・濯・於・潮中」「浮・濯・於・潮上」と表記を使い分け、海面と海中と海底の三層にわたる水中の儀法を描いている。

この、水の深淺の扱い方で同曲なのが、前出のサルタヒコノカミ(猿田毘古神)の溺死の叙述であったが、特に、最も芸能化して伝えられているのが、ホデリノミコト(海幸彦)が弟のヒコホデミ(山幸彦)との争いに敗れた時の伝承であろう。

わたつみの国からこの世「上つ国」に帰り戻ろうとするヒコホデミノミコトに対して、海神は、海の宝珠シオミツノタマ・シオヒルノタマを与えて智慧を授け、兄・ホデリノミコトを「悩ましめ苦しめたまへ」と教えるのであるが、このわたつみの珠の呪力によって水に溺れ苦しむホデリノミコト(海幸彦)の様子を、記紀はさまざまに伝えるが、特に『書紀』の一書に、ヒコホデミに降伏した兄神が、その水に溺れる動作を芸能として演じて見せた、と伝えているのは異色である。

是に、兄、著犢鼻して、赭を以て掌に塗り、面に塗りて、其の弟に告して曰さく、「吾、身を汚すこと此の如し。永に汝の俳優者たらむ」とまうす。乃ち足を挙げて踏行みて、其の溺苦びし状を学ぶ。初め潮に漬く時には、足占をす。膝に至る時には足を挙ぐ。股に至る時には走り廻る。腰に至る時には腰を捫ふ。腋に至る時には手を胸に置く。頸に至る時には手を挙げて飄掌す。爾より今に及るまでに、曾て廢絶無し。
 (『日本書紀』 卷第二)

この伝承は、後世の隼人族の歌舞「隼人舞ひ」の芸能の背景として、その起源を説いた神話と解され、海幸彦が弟神に対して、
 若し我を活けたまへらば、吾が生みの児の八十連属に、汝の垣辺を離れずして、俳優の民たらむ。
 (同前)

ここで注意したいのは、この水に溺れる動作の芸能が、かなりリアルであり、水が、足首から徐々に上昇しつつ人体を没してゆく過程を克明に描いて、水の深淺と芸能の関係を、水層的に示していることである。

つまり、この水の深浅に対応する動作の様態を、前述のイザナギノミコトの禊祓や、サルタヒコノカミの溺死などと、同心円上の伝承とみなす時、隼人舞いの起源を説いた海幸彦の「溺水芸能」も、もっと古くは、聖なる入水の儀式に源を發していたのではないかと考えられてくるのである。

先に、ヤマトタケルノミコトの霊が、白智鳥に化して天翔ったという伝承に係わる古代歌謡が、「皆、その御葬に歌ひき。」(記)とあったことから、それが、水辺の葬儀の歌であろう、と述べたが、その中の一首、海処行けば 腰なづむ 大河原の 植多草 海処はいさよふ

(『古事記』)

の表現などは、海水に腰をとられる芸態が、葬儀の庭で演じられたことを想像させるではないか。

「鴉鳥の 淡海の海に 潜させなわ」と、忍熊王が入水に際して歌ったと伝えられるあの語調が、あらためて浮かび上がってくる。

海神の持てる白玉見まく欲り千遍そ告りし潜する海人

(『万葉集』 卷七)

潜する海人は告るとも海神の心し得ずは見ゆといはなく (同前) のような、潜水に先立つ海人の唱えごと、海神への祈りの呪詞と儀式のなごりであったのであろう。

水に入ること。それはもともと神聖なる儀式であった。もちろん、古来のみそぎから、潔斎・沐浴とつらなる強い浄水の信仰は、今あらためて論ずるまでもないが、それとともに、「入水の儀式」の信仰と伝承は、

わが文学と芸能の流れに、深い翳を見せているのである。

3 入水の水先案内——水鳥たち——

一章の「みそぎ」「配流」等の節でも触れたが、入水の文学に密接に係わってくる「水鳥」の役割もまた、見逃すことができない。白鳥処女説話(天人女房譚・羽衣伝説)に見られる天女・神女の水浴びが、聖なる巫女の禊祓の様相を伝えていることについては、前に触れたが、『丹後国風土記』の「比治の真名井」の話や、『近江国風土記』の「伊香刀美」の伝承なども、いわゆる白鳥処女の原型に通ずる水鳥の古き想念が漂っている。

鳥が道案内をしたという話の古型は、神武天皇東征神話の中で、天皇の軍勢を熊野から吉野に導いたというヤタガラス(八咫鳥)の伝承などが有名であるが、同じ神話の中で、天皇の軍勢が瀬戸内海を東に向かう途次、

亀の甲に乗りて、釣しつ打ち羽挙き来る人、速吸門に遇ひき。爾に喚び帰せて、「汝は誰ぞ。」と問ひたまへば、「僕は国つ神ぞ。」と答へ申しき。又、「汝は海道を知れりや。」と問ひたまへば、「能く知れり。」と答へ申しき。

(『古事記』 中巻)

という記述がある。この「相挙き来る」は、羽ばたきしてくる、という意味で、海路の案内人が海上を羽ばたきしつ近づいて来た、という描写が、あたかも水鳥が水路を案内したように描かれていることが興味深い。

水鳥が「死」に係わり合うという伝承は、意外に多い。たとえば、高

天原から下界に遣わされながら、八年経っても復命せず、ついに高天原からの矢で射殺されたアメノワカヒコ（天若日子）の葬儀には、多くの水鳥・山鳥たちが立ち会ったという。

乃ち其処に喪屋を作りて、河鴈を岐佐理持とし、鷺を掃持とし、翠鳥を御食人とし、雀を碓女とし、雉を鳴女とし、かく行ひ定めて、日夜八夜を遊びぎ。

〔古事記〕 上巻

また、ヤマトタケルノミコトの霊が、八尋白智鳥となつて空翔けたという話は、葬送の歌に触れて前述したが、死霊の化した白鳥が、海辺を飛び去るといふ伝承は暗示的である。さらに見逃されがちであるが、『書紀』の一書によれば、山幸彦が兄の釣鉤を失くして責められ、海岸に出て憂い嘆いた時に、ワナにかかった「川鴈」を救け放し、そのあと「塩土老翁」が現われて、山幸彦をマナシカタマ（無目堅間）に載せて海に沈め、わたつみの国に送った、という伝えのあることである。

つまり、異郷への旅立ちに際して、水鳥が果たす役割はかなり重要であったはずである。そしてこの想念は、後世の物語にもひそやかな波残りを伝えていく。

はつかりは恋しき人のつらなれや旅のそらとぶこゑのかなしき
心から常世を捨ててなくかりを雲のよそにも思ひけるかな

〔源氏物語〕 須磨

など、いわゆる「常世の雁」の想いは生き続ける。また、かの有名な、名にしおはばいさ言問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと

〔伊勢物語〕

の歌も、その風趣と技法もさることながら、都鳥に託した遠き人の安否の問いかげの中に、鳥が遙か異郷の消息を運ぶものという想念の底にある、亡き人の霊の化身と考えた古き信仰を見落すことはできないだろう。特にこの歌の場合、下の句の「ありやなしやと」の部分に比重を置けば、人の命の「在りや亡しやと」と問いかける語調には、単なる旅先における消息の期待感よりも、むしろ切実な死の訃報の惧れが、水鳥の不吉な影におびえているかのような歌とは解せないであろうか。

こうして、古き水辺の鳥たちは、また遠きこの世ならぬ異郷——それは楽土であれ死界であれ——への、海路の旅の水先案内として、また誘いの化身として、想念されたのであった。

四 入水の花——橘——

あのタジマモリが、遙かなる海彼の国「常世」から持ち帰った「トキジクノカクノコノミ」は、「是れ今の橘なり（記）」とあった。それゆえ「橘」が、古来「常世」と密接な関連で考えられ発想されてきたことは、今あらためて言うまでもない。

常世物この橘のいや照りに吾ご大君は今も見るごと

〔万葉集〕 卷八

のように、橘は瑞花嘉樹の象徴として、永く詩歌に詠われ続けてきた。

しかし、同時にそれはまた、さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

〔古今和歌集〕 卷三 ほか

ほととぎす花橘の香をとめてなくは昔の人や恋しき

〔新古今和歌集〕 夏 ほか)

のように、昔の人・亡き人の思い出を蘇らせ、追憶を新たに満たしてくれる花とも信じられた。しかし、亡き人への追憶を蘇らせるということは、また、死者の復活と再生への期待に連なる想念でもあった。つまり「橘花」とは、死霊の鎮魂と復活をもたらしてくれる呪花でもあったのである。それは、常世のトキジクノカクノコノミからの連想だけではない、もっと広く、水界と入水の想念に深く係わり合っていると考えることができる。

なぜなら、かのイザナギノミコトが禊祓した海も、わたつみの国に赴くヒコホホデミに策を授けたという「八尋ワニ」の棲む海も、みな「橘の小戸」と呼ばれたし、また、走水の海で入水したヤマトタケルの妃の名は「弟橘媛」であった。なお『常陸国風土記』によれば、ヤマトタケル(倭武尊の天皇)がこの国の飽田の村に宿りした時、

是に、天皇、野に幸して、橘の皇后を遣りて、海に臨みて漁らしめ、捕獲の利を相競ひて、山と海の物を別き探りたまひき。此の時、野の狩は、終日駈り射けれども、一つの穴をだに得たまはず、海の漁は、須叟がほど才に採りて、尽に百の味を得たまひき。獺と漁と已に畢へて、御膳を差めまつる時に、陪従に勅りたまひしく、「今日の遊は、朕と家后と、各、野と海とに就きて、共に祥福を争へり。野の物は得ざれども、海の味は尽に飽き喫ひつ」とのりたまひき。

〔常陸国風土記〕 多珂郡)

とあって、つまり、「海の幸」の呪力を具えていたという弟橘媛と、海との関連が意外に深いことに気づくのである。

橘の花散る里のほととぎす片恋しつ々鳴く日しぞ多き

〔万葉集〕 卷八)

は、亡き妻を恋いつつ嘆いた哀悼の歌。
鏡なすわが見し君を阿婆の野の花橘の珠に拾ひつ (同前 卷七)
に至っては、火葬したあなたの遺骨を、花橘の珠として拾った、という恐ろしい挽歌である。

タジマモリがこの国に持ち来たった「非時香菓(トキジクノカクノコノミ)」も、常世にあってこそ「非時(トキジク)」であったが、この世に持ち帰ってしまったのは、浦島子の「玉匣」と同様、異郷の呪力が破れて死を招いたと解するのが古義ではなからうか。

古き中国の楚辞『九章』の「橘頌」に、

后皇、嘉樹、橘徠、服兮

受命不遷、生三南国兮

とある。つまり——嘉樹・橘は天命を受けて南国に生じ、他の土地に移すことができない。もし無理にこれを北の地に移植すれば、化して枳(カラタチ)となってしまう——という伝説である。

記紀に伝える垂仁天皇とタジマモリの死が、実は、異郷の呪花「橘」の禁忌を破って、移し替えようとしたことへの「祟り」であったかもしれぬ、と考えると、その意味は深刻である。そこに視点を据えれば、「弟橘媛」の入水も、禊祓の聖地「橘の小戸」も、その水界の妖しき関

わり合いを象徴する名称として、不気味に浮き上がってくるのである。

ここまでくると、「橋」の本質は、単に後世的に賞美されるような「常世」の寿福の花実だけではなさそうである。いやむしろ、それは、もともと、この世に移し替えてはならぬ禁断の嘉樹か、あるいは常夜の死の花であり、亡き人の追憶と再生をも司る水界の花実、「入水の呪花」ではなかったか。

おわりに

古き大陸に、入水の賦として有名なのは「屈原」の物語であろう。紀元前三世紀、己れの忠信を貫きながら、楚王に疎んぜられて放謫された屈原は、時勢と世情を慨嘆しつつ、ついに汨羅くまろに身を投じたと伝えられているが、楚辞の中から入水を覚悟した章句の幾つかを部分的に拾い上げてみよう。書き下し文に直してみると、

沅湘ノ玄淵ニ臨ミ 遂ニ自ラ忍ンデ流レニ沈マン 卒ヒ身ヲ没シテ名ヲ絶タン
〔九章〕 惜往日

江淮ニ浮ンデ海ニ入り 子胥ニ從ヒテ自ラ適カン 大河ノ洲渚ニ望ミ申徒ノ坑迹ヲ悲シム
〔九章〕 悲回風

寧ロ湘流ニ赴キ 江魚ノ腹中ニ葬ラルルモ 安ンゾ能ク皓皓ノ白キヲ以テ 世俗ノ塵埃ヲ蒙ランヤト
〔漁父〕

等々。幸か不幸か、わが古代の神話伝承には、このような強烈な自我を貫いて、己れの命を水中に絶った「入水の文学」は稀薄である。しかしその代わりに、「入水」に係わる多彩にして豊かな文芸の流れを見出だ

すことができる。もちろん、それらが古き「水の信仰」や「海部の伝承」に裏づけられていることは言うまでもないが、「入水」という、人の命をさまざまな形で水中に没する行為の背景には、美しき水の面や、見遙かす海原に寄せた古代人たちの、豊かな情感と呪的な想念が潜んでいたと考えるほかはない。

海にます神のたすげにかからずば潮のやはあひにさすらへなまし

〔源氏物語〕 明石

嘆きわび身をば捨つとも亡き影に憂き名流さむことをこそ思へ

〔同前〕 浮舟

流れても逢瀬ありやと身を投げて虫明の瀬戸に待ち心みむ

〔狭衣物語〕 卷二

まこと、「入水」とは、この島国をとり巻きめぐる蒼溟な大海原と、清澄な山河に寄せた、遠き代からの果てしなき思慕と郷愁の呪儀であり、その風土に育くまれた、転生と鎮魂の文学でもあったのである。